

大洲市観光まちづくり町家活用エリア基本計画

2019 年 4月

【 大洲市観光まちづくり戦略会議 】

1. 大洲市全体の地域概況
2. 大洲城下町の歴史
3. 大洲城下町の空間分析
4. 大洲城下町の地域資源
5. 大洲城下町の歴史的風致が感じ取れる建物
6. 大洲城下町の地域評価
7. 大洲城下町の地域戦略
8. 大洲城下町のエリア計画
9. 主要物件の活用計画
10. 1期工事スケジュール
11. 魅力ある回遊動線を確保する上で重要となる物件

1. 大洲市全体の地域概況

1-1. 地域概要

市町村概要	愛媛県大洲市(人口:約44,000人)
風土気候	・70.6%が森林で構成 ・谷を縫うように肱川が流れる ・大洲盆地に城下町が広がる ・昼夜の寒暖差のある内陸性盆地型気候 ・西部は温暖少雨の気候
主な地域資源	・肱川 ・大洲城と城下町の町並み ・臥龍山荘 ・鵜飼
アクセス	【松山】電車:40分／車:1時間 【松山空港】車:1時間 【尾道】車:2時間30分
その他	・道後温泉などの観光地松山に近い ・内子町などの歴史地区が近接

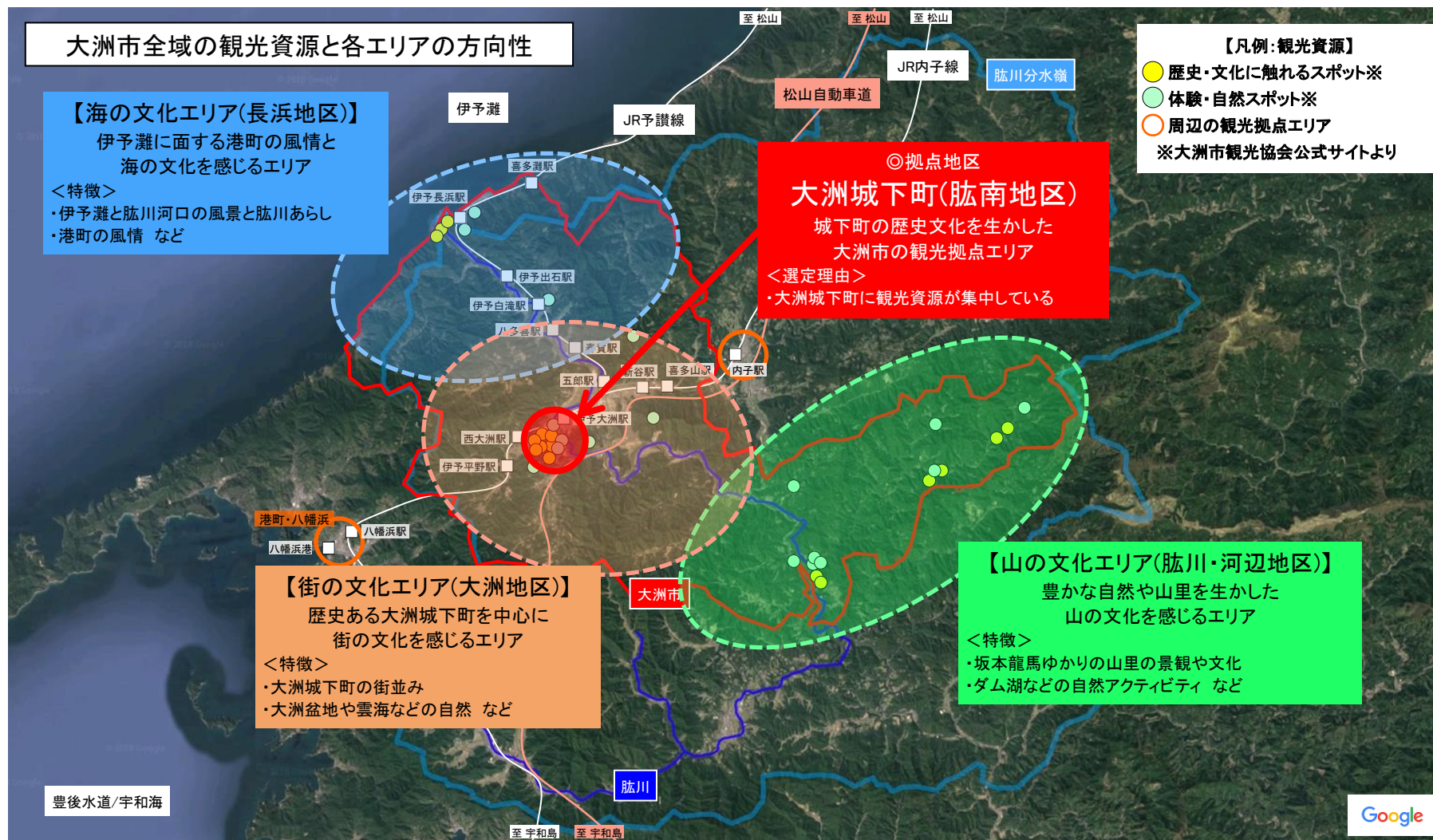


- 大洲市には、肱川の谷筋の特異な地形環境に、歴史文化、自然体験など数多くの観光資源が分布する。
- 市域には鉄道や高速道路が走っており、松山や八幡浜、宇和島などへのアクセスが容易。



1-4. 大洲市全域のエリア方針

- 市内全域で特徴的なエリアを有しており、地域に合わせた観光まちづくりの方向性が考えられる。その中でも本計画の対象地域である大洲城下町に資源が集中分布しているため、拠点エリアとしての先行実施が必要と考える。



2. 大洲城下町の歴史

2-1. 城下町の歴史変遷

- 大洲城下町は肱川から始まり、肱川沿いの城下町の成立から発展、肱川の水運による産業発展まで、肱川が中心的な役割を果たしてきた。また、明治・大正頃が「最も栄華を誇った時代」と言われている。

肱川のはじまり

縄文・弥生時代

- ・大洲地方には、紀元前1万年頃から人々が住み始めたと考えられている。
- ・縄文・弥生時代には、田合遺跡等多くの遺跡・遺物が多種多様にわたり、長い時代に及んでいる。
- ・巨石が崇拝され、東洋一といわれる高山のメンヒルをはじめ、市内50数箇所に巨石や巨石群が構築された。

飛鳥時代～平安時代

- ・大化の改新によって設けられた地方制度では、大洲は伊予国宇和郡に属し、866年には独立して喜多郡となった。
- ・喜多郡は矢野郷・久米郷・新屋郷の3郷に分かれていた。
- ・源平の合戦で喜多郡も戦乱の渦中に巻き込まれ、1185年には河野通信が比志城に立てこもり、平氏の攻撃を退けた。

大洲城のはじまり

鎌倉時代～安土桃山時代

- ・伊予国の守護に就いた宇都宮氏が1330年着任から240年近く支配するところとなった。
- ・宇都宮豊房は、大津地蔵嶽(じぞうがだけ)に城を築いたとされている。
- ・その後乱世を反映し、大野直之、小早川隆景、戸田勝隆らが相次いで城主となった。
- ・1595年、豊臣秀吉の重臣・藤堂高虎が、大津(現大洲)に入り、町割など近世城化の基礎を築いた。

江戸時代

- ・1609年には脇坂安治に引き継がれ大洲城天守を造営。(脇坂氏が行ったとみるのが一般的といわれている)
- ・脇坂安治の後を受けて1617年に、加藤貞泰が米子から大津へ転封した。
- ・以来、明治維新まで13代、250年余りにわたって大洲は加藤氏の治政のもとにおかれた。

栄華を極めた明治時代

明治時代～現在

- ・明治・大正頃は、大洲の歴史の中で最も栄華を極めた時代と言われ、養蚕・製糸・木蠟とその水運で栄えた。
- ・明治の先覚者として、国学者の矢野玄道、明治憲法制定に尽力した香渡晋、シーボルトに仕えた医学者の三瀬諸淵、函館五稜郭を設計した武田成章など多くの偉人を輩出している。
- ・現在でも和紙は大洲和紙として、蚕糸は伊予生糸として知られているものの、大正時代を境に各産業が衰退。
- ・昔から肱川のもたらす肥沃な土壌を利用した農業を中心に発展してきた大洲市だが、近年は第3次産業への従事者数が50%を超えるようになってきている。

現在

2-2. 近現代の大洲城下町

- 明治時代の大洲城下町は、武家屋敷跡などで養蚕業や製糸工場などの新しい産業が生まれた。
- 大正時代末期は化学繊維の普及や世界的な不況で養蚕製糸業は衰退したが、松下寿工業の操業で工業地域へと変化。

明治時代

大洲城廃城、跡地の公園化計画などの変化と同様に、大洲の城下町でも明治時代に大きな変化が生じることとなる。

荒廃化していた武家屋敷地は、養蚕業という新しい産業の受け皿として活用が図られることとなった。(武家屋敷地が町人地に比べて広大で連続する居住区を形成していたため。)明治18年(1885)頃から多数の武家屋敷地が、宅地から畑地へ土地の地目を変更されている。町人地であった区域には、商家以外に多数の製糸工場が建設され、昭和時代初期まで一大製糸工場の町として大洲を支え続けることとなった。(※養蚕業が本格的に大洲地方で盛んになるのは明治に入ってからのこと。)

水資源の豊富さで、舟運が発達し、さまざまな産業が生まれた。

西洋の文化を積極的に取り入れ、赤煉瓦倉庫など現在でもその名残を感じられる建物が城下町には散在している。

城下町の周囲には田畑が広がり、主要産業も肱川ゆかりの舟運、漁業、林業、農業だったと思われる。

大正・昭和～平成

大正時代末期頃からの化学繊維の普及に加え、世界的な不況も重なり、大洲地方の養蚕・製糸業は衰退の一途を辿ることとなった。また、川舟が主流の肱川で、大正7年(1918)に鉄道が長浜～大洲間で開通した。その頃から町内にあった工場は姿を消していった。旧程野製糸工場繭倉庫などが残されたのは、当時の大洲町市街地の中で一際目立った建物であったためと考えられる。

製糸業や木蠟業などの産業が衰退すると、その後は目立った産業が発展していないが、昭和40年(1965)代に入るとこれまで盛んでなかった工業が発展を見せるようになる。昭和48年(1973)に松下寿電子工業株式会社の大規模工場が操業を開始すると、大洲の産業の中心的な役割を果たすようになった。これを契機に、電気・化学・食品などの企業が相次いで大洲へ立地するようになると、大洲は農村工業地域として新たな発展をはじめることとなった。



2-3. 大洲城の歴史

- 肱川の河岸にそびえる歴史ある特異な名城。歴史を経て、他の城と同じく明治維新後に大部分が解体された。
- 天守の復元事業では、本物の木造の在来工法にこだわり、市民の本物を大切にする気質や想いと共に実現した。

大洲城の歴史

鎌倉時代～戦国時代

伊予国の守護職となった宇都宮豊房が1330年の着任から喜多郡支配の拠点として地蔵嶽(じぞうがだけ)に中世城郭を築いたことが始まりとされる。**築城にあたっては肱川の洪水で石垣や櫓が押し流される一進一退の難工事であったとされるにも関わらず、この地に建てられた。**その後、大野直之、小早川隆景、戸田勝隆らが城主となった。その中でも、四国平定後、伊予を支配した小早川隆景は、国内の城郭の整理を始め、その中で残したいと考える主要な10か所の城を示しているが、そこに大津城も含まれていた。10城の内、**喜多郡内の城は大津城のみだったので、喜多郡支配の中心と考えていたと考えられる。**1595年、藤堂高虎が、板島(宇和島)から大津(現大洲)に入り、町割など近世城化の基礎をつくった。

江戸時代

1609年、淡路国州本城から入城した脇坂安治が引き継ぎ、大洲城天守の造営や藩政の整備を行った。脇坂氏の後を受けて1617年に、加藤貞泰が米子から大津へ転封した。貞泰は藩の基礎をつくり、二代藩主泰興は現在も見られる治水技術を用い肱川の洪水に備えた。

明治時代～現代

明治維新後は、場内のほとんどの建築物は破却されたが、地域住民の活動により、本丸の天守と櫓の一部は保存された。しかし、天守は老朽化と構造上の問題で明治21年(1888年)に解体されたが、2004年に天守が戦後初の木造の伝統工法で復元され、今に至る。

大洲城復元への市民の想い

城の復元においては、鉄筋コンクリート造の復元がほとんどとなっている中、大洲城の復元では、「復元した天守が将来文化財となるよう可能な限り本物を目指そう。そして、その価値を市民と分かち合い、市民手づくりの天守を復元しよう」という思いをもとに、各種調査の結果や残っていた古地図・古写真、木組み模型などを参考にしながら、徹底して在来工法の木造での復元にこだわり、法律的な課題などもクリアしながら、戦後初の在来工法での復元を実現した。

工事期間中には2万人もの見学者が訪れ、寄付金は5億円を超えるほどの状況であり、また、寄付木材にも天守全ての柱166本に、寄付者の名前が記されているなど、市民とともに復元を実現し、市民の想いが詰まった復元事業であったと言える。

これらの取り組みは、臥龍山荘を長い期間をかけて本物の空間に作り上げた、河内寅次郎の本質へのこだわりにも通じるところがあるように感じる。



2-4. 臥龍山莊の歴史

- 多大な時間と財を使いながらも、誇示せず慎ましやかな美を尊ぶ、本質の日本文化を伝える特別な空間である。
- 重要文化財やミシュラングリーンガイドに指定されるなど、大洲城下町の貴重な観光資源となっている。

臥龍山莊とは

この地を『臥龍』と命名したのは、大洲藩第3代藩主加藤泰恒が「蓬莱山が龍の臥す姿に似ている」ことから名付けたものと言われている。

肱川沿岸のもっとも優れたこの景勝地に初めて庭園を築いたのは文禄年間、藤堂高虎の重臣、渡辺勘兵衛の時代に遡る。その後、この地をこよなく愛した泰恒公は、吉野の桜、龍田の楓を移植し、庭に一層の風致を加えた。その後、歴代藩主の遊賞地であったが、明治以降は補修されることもなく自然荒廃していた。

現在の山莊は、明治時代に新谷出身の豪商で木蠟貿易に成功した河内寅次郎が、老後の余生をここで過ごしたいと大洲随一の景勝地であるこの地に築造した別荘である。

現在では、臥龍院、不老庵、文庫の3棟が国の重要文化財となっているとともに、2011年にはミシュラングリーンガイド一つ星を獲得するなど地域のシンボルであり貴重な観光資源となっている。

臥龍山莊データ:

不老庵 明治34年(1901)竣工
知止庵 明治34年(1901)竣工
臥龍院 明治40年(1907)竣工
施主 河内 寅次郎

施工

大工 中野寅雄(大洲)、草木国太郎(京都)

漆工 九代 中村宗哲(京都)

金工 九代 中川浄益(京都)

木彫 十三代 駒澤利齋(京都)

建具 大村藤三郎(神戸)

襖(表具) 八代 奥村吉兵衛

板戸 鈴木松年画

襖絵 吉岡拝山画

庭園 植徳(神戸)



臥龍山莊に込められた思い

茶の湯を嗜む数寄者であった河内寅次郎は荒廃していたが、古くから臥龍の名で呼ばれるこの地を購入、構想10年、着工から3年8ヶ月を要して臥龍山莊を完成させた。

臥龍院は数寄屋づくりで細部にまで豪華で緻密さを持たせており、来訪者に栄華を極めた大洲とその誇りを感じさせる。それに対し、外観は茅葺きの寄せ棟造りであり、農家を思わせるしつらえとなっている。また、対岸からの景色も考慮に入れて、計画されたと考えられており、借景をふんだんに取り入れ、四季をじっくり感じられるしつらえである。

「質素に見えても良いものを吟味し、豊かな気持ちでお茶をすすめるのが良い」という思想に寅次郎が惹かれていた表れであり、誇示する美よりも、慎ましやかなものが良いとする伝統的な日本文化ならではのコンセプトを取り入れたと捉えられる。

これは、当時日本文化が西洋文化より劣ると考えられ、衰退していった中で、近代数寄者により伝統的な日本文化が取り戻されていったものとも考えられており、寅次郎も同様の思いを臥龍山莊に込めていたと考えられる。

2-5. 大洲の先人とその思想

- 多くの偉大な先人が大洲からは生まれている、その先人の人々の生き様を見ていくと、いずれも「新しい時代を見据えた発想・アイデアで行動する」大洲の気質が見て取れる。

- ・大洲の基礎をつくった江戸時代の人物と栄華を極めた明治時代に精力的に活動した人物が多く見受けられる。
- ・暴れ川である肱川のたもとに城下町と大洲藩を築いた藤堂高虎、脇坂安治、加藤貞泰。大洲の教育に影響を及ぼした中江藤樹と川田雄琴。
- ・矢野玄道は大洲を出て勤王を唱え、維新の15年前に王政復古を予言して、世界の国々の諸制度について研究し、三瀬諸淵は村田蔵六、シーボルトの教えを受け当時の医学界の最高峰に位置にあり、武田成章は蘭学・西洋兵学を学び函館五稜郭を設計した。これらは小藩から多くの志士が輩出する要因となった。
- ・坂本龍馬に脱藩の道を与え、いろは丸を貸し与えた大洲藩は幕末の時代に新しい時代を見据え行動していた。

藤堂高虎

築城の名人。伊予宇和島を与えられてから大洲城に居城した。大洲城を近世城郭へ整備し、城下町の町割りの基礎を築いた。

脇坂安治

藤堂高虎の後に領主となり、給人所法度を定め、庄屋による支配体制を確立させた。大洲城の天守の築造にも関わったとされる。

加藤貞泰

初代大洲藩主。脇坂安治の体制を引き継いだ。また船手組制度の整備や造船に力を入れるなど精力的に藩の基礎をつくった。

中江藤樹

日本における陽明学の祖。「近江聖人」と称えられている。大洲藩の教育に大きい影響を及ぼした。

川田雄琴

陽明学者で大洲藩士。藤樹の学問や思想を継承し、普及のきっかけをつくった。

矢野玄道

国学者。25歳のとき平田篤胤の門に入り、国学の研究に生涯をさした。著書は700におよぶ。

三瀬諸淵

蘭医シーボルトに師事した医者。電信機械の実験を行うなど、日本の洋学界の発展に大きく寄与した。

武田成章

兵学等の研究や軍部の要職を歴任した軍人。兵術等の研究に打ち込んだ。函館の五稜郭を築城した。

池田貫兵衛

茶や樟腦の取引で一定の成功を収め、明治後期の神戸の有力企業において、軒並み重役を務めた。株式会社喜多組を設立した。

河内寅次郎

木蠟貿易に成功した貿易商。池田貫兵衛とともに株式会社喜多組を設立した。大洲随一の景勝地に10余年をかけて臥龍山荘を築造。

3. 大洲城下町の空間分析

3-1. 大洲城・大洲城下町の空間的特徴

- 大洲城は天然の川を巧みに生かして堀に見立てた数少ない水城である。
- 大洲城下町は、肱川の流れを考慮に入れながらも、大洲城から富士山への軸線を意識した町割になっている。

大洲城・城下町の空間的特徴

●大洲城の特徴

肱川の流れを巧みに生かした大洲城は平山城であり水城(川城)、他に水城と言われる城は大津城、高松城、中津城、今治城などあるが、天然の川を堀と見立てる城は少ない。

小高い丘の上にそびえているため、城下町から見上げることができ、城下町のシンボリックな存在となっている。

<独特な要素>

- ・高さ20mほどの小高い丘の上、高い石垣
- ・東に肱川の深淵、北に久米川、内堀・外堀と二重の堀
- ・奇数が好まれた当時ではとても珍しい四重の天守

●大洲城下町の特徴

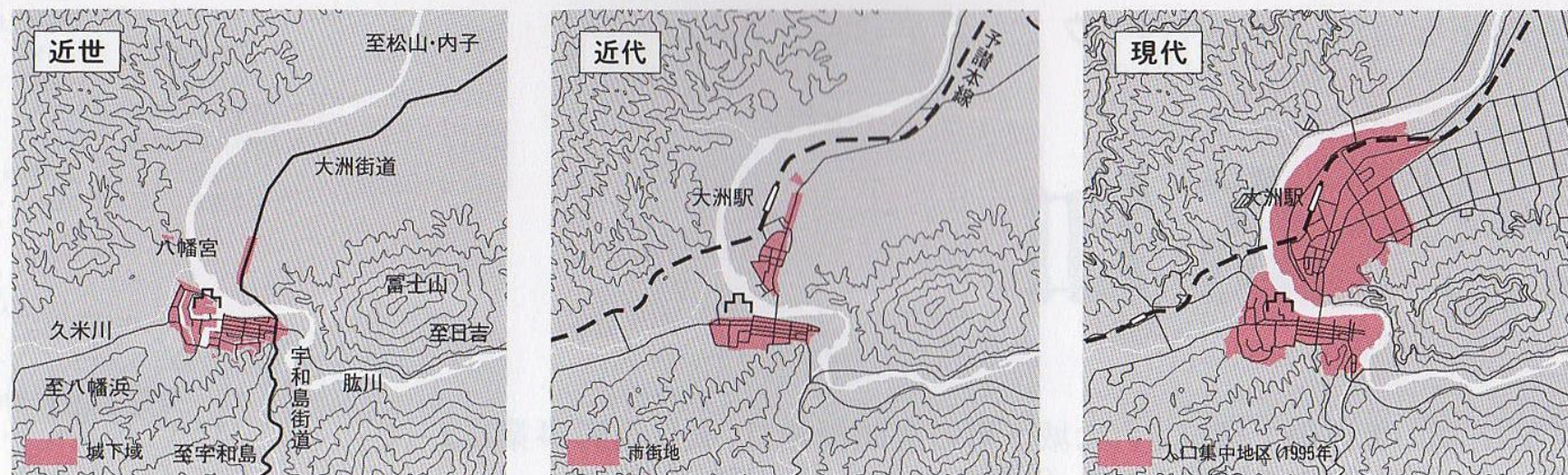
町割は大洲城から富士山に向けた軸線に沿わせるかたちで武家屋敷をL字型に、町屋をグリッド状に配していた。間口が狭く、奥行きが長い短冊状の町割で整然と区画された。

肱川の南側に城下町が発展したのは、肱川の氾濫を考慮に入れた町並み形成と考えられる。



3-2. 大洲城下町の変遷

- 大洲城と城下町は肱川の反乱の影響の少ない南側に、富士山の東西の軸線を意識した町割で形成された。
- その後の治水技術の発達や都市化によって、近代の開発で肱川の氾濫原であった肱川北側へ市街地が広がった。

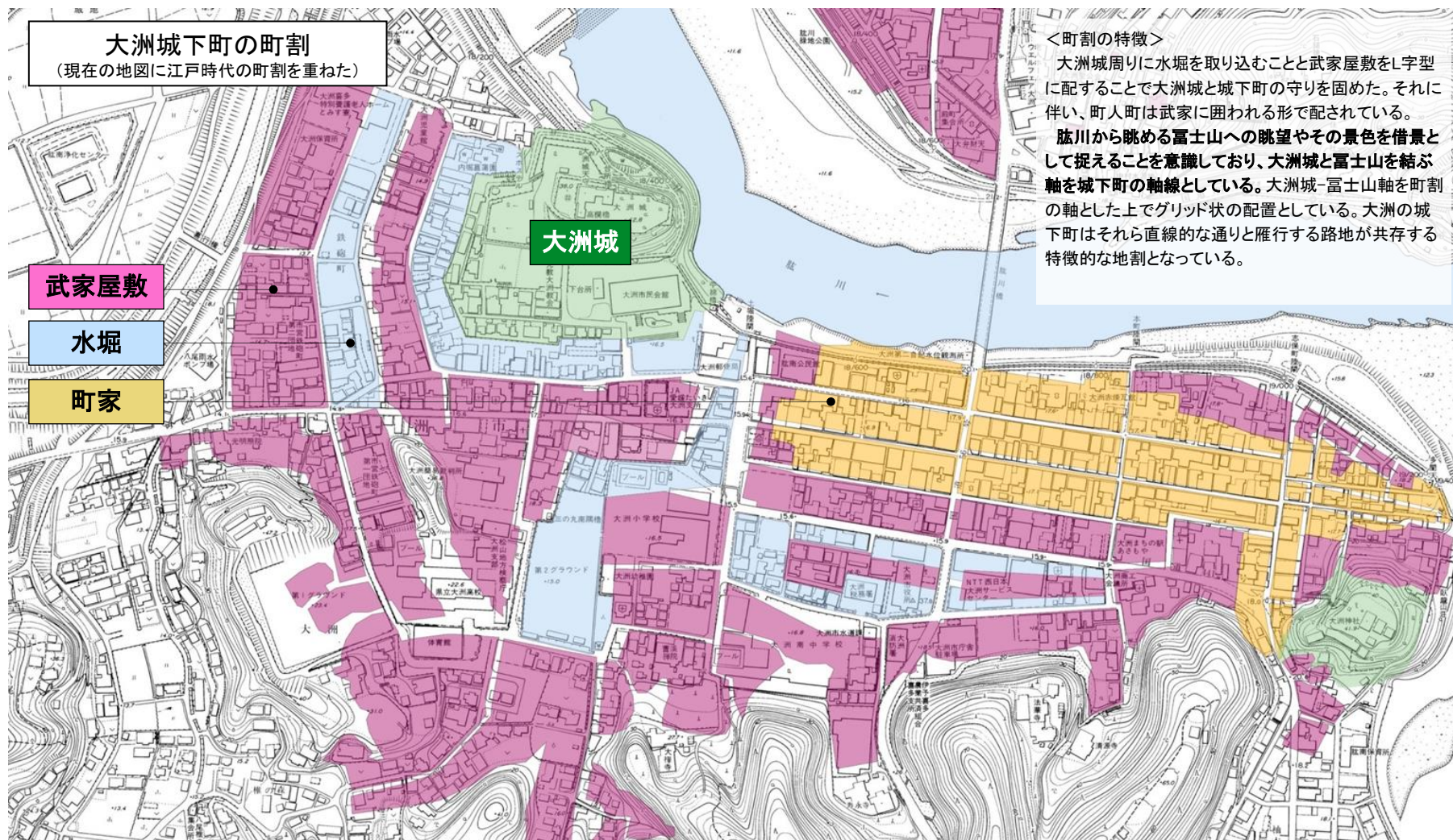


肱川の湾曲部に形成された城下町とその変遷 (佐藤滋+城下町都市研究体 著「城下町都市」から引用)

- ・江戸時代、大洲城から富士山に東西の軸状形成された町割が現在の大洲の基礎となっている。当初は主に肱川の南側に城下町がつくられ、北側には武家屋敷と町屋の一部がある程度だったが、鉄道と治水技術の向上とともに肱川の北側の肱北地区に新市街地がつくられ、肱川の南北に街区が形成された。(もともと肱川の北側は氾濫原だったと思われる。)
- ・その結果、町の中心部が肱川の南側から北側に次第に移っていき、今では町の拠点である市施設と交通の拠点である駅との間、つまり町の中心部に肱川と住宅街が形成されている。
- ・現存する歴史地区は江戸時代の町家の形態を引き継ぐ軒が低い切妻平入造の伝統的な建物と、明治-大正期に建築された西洋的な建造物が混在しながら残っている。

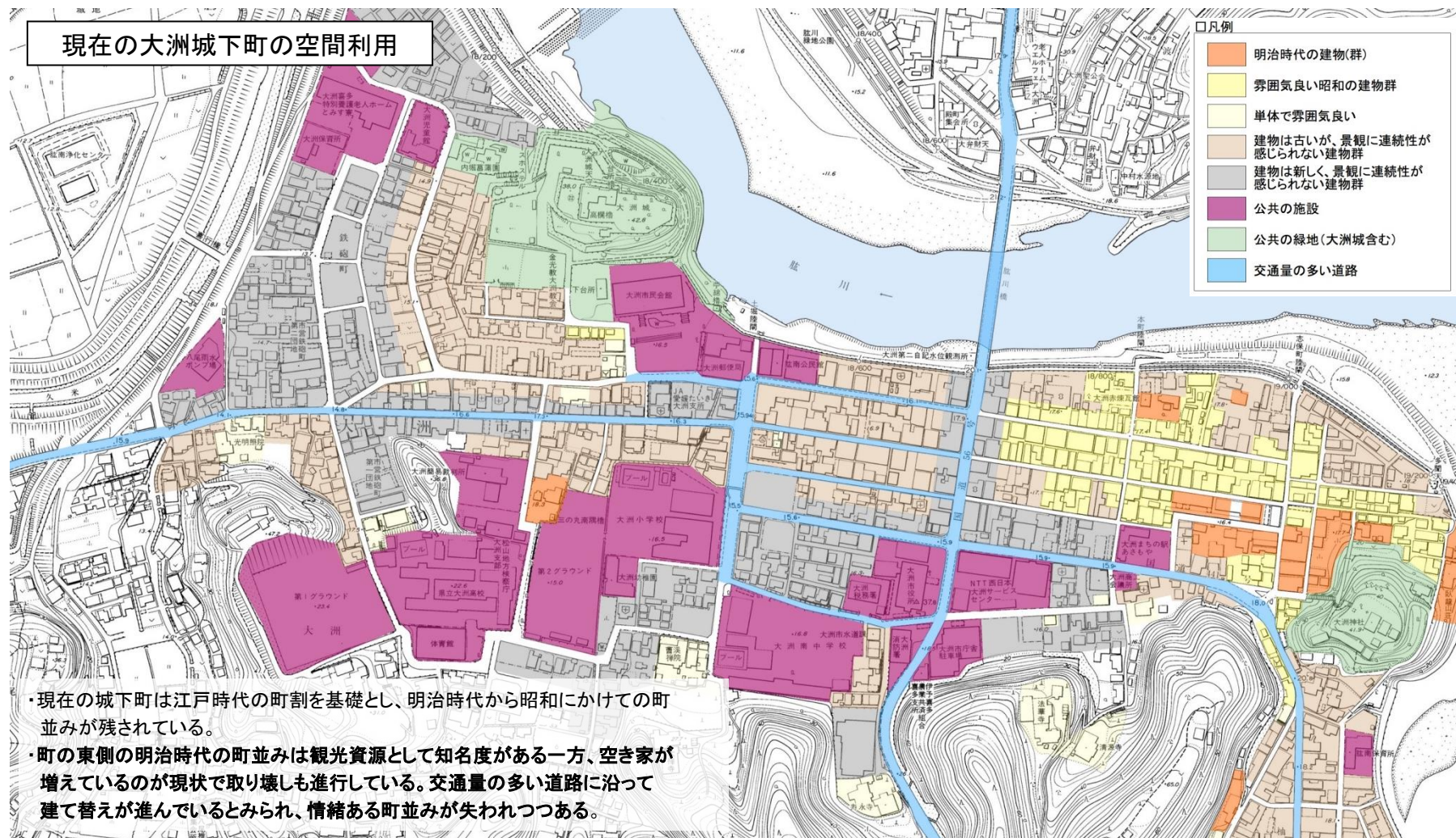
3-3. 大洲城下町の町割

- 肱川を生かし、大洲城を中心に天然の川を生かした水堀が張り巡らされ、特徴的な城下町の町割となっている。
- 現在でも昔の町割が今もなお残っているが、城下町内の水堀などは埋め立てられ今はその姿が残っていない。



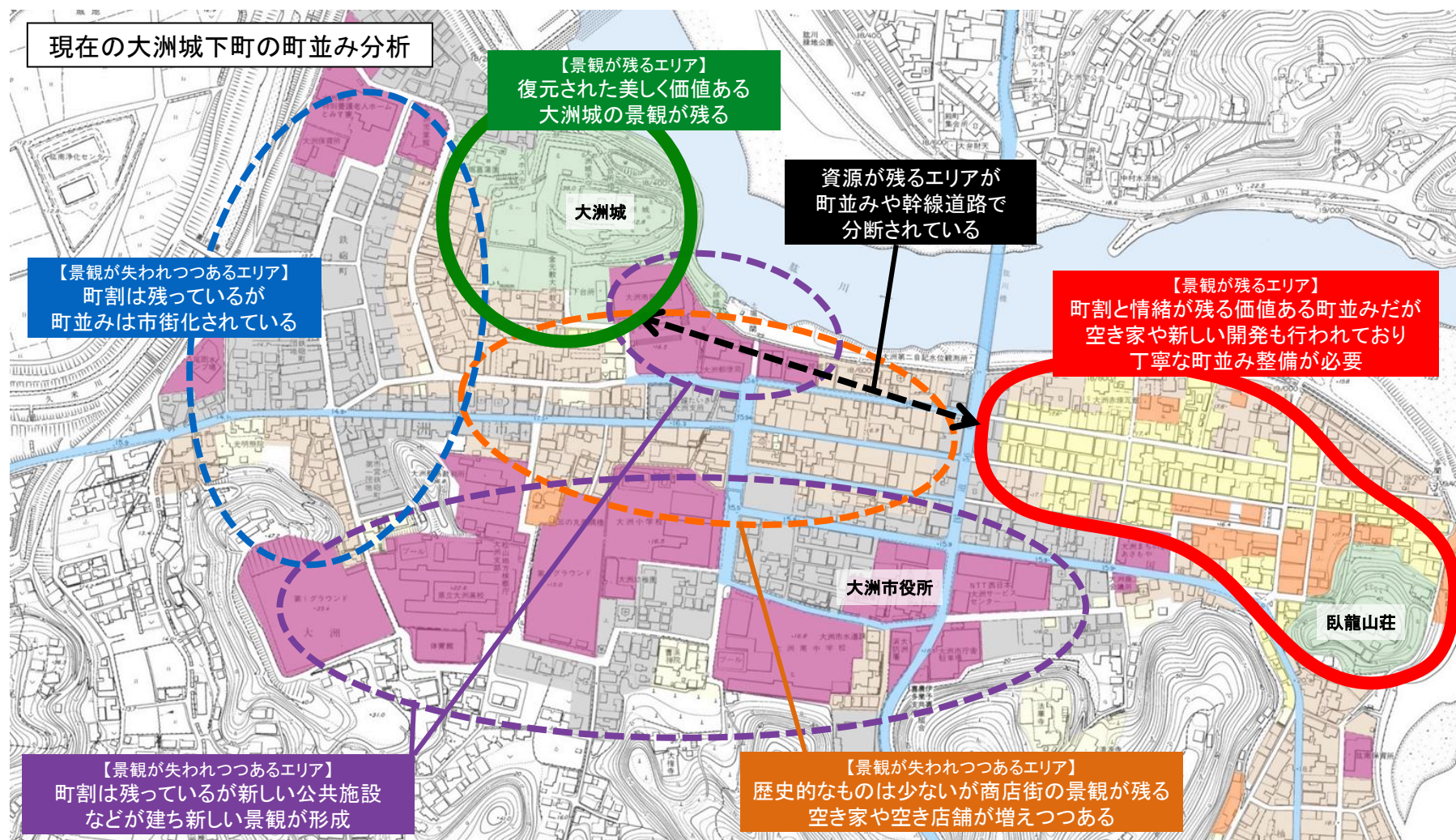
3-4. 現在の大洲城下町の空間利用

- 町割はほぼそのまま残っている一方で、空間利用としては多くが新しい町並みに変化してきている。
- 風情ある町並みは、大洲城や臥龍山荘周辺の一部に残っているが点在しており、保存や活用が望まれる。



3-5. 現在の大洲城下町の町並み状況

- 大洲城周辺や城下町西側では今も風情ある町並みが残っている。空き家や新しい景観も生まれてきている。
- 城下町中央や周辺部では、新しい商店・住宅・公共施設などで開発が進み、古い景観や町並みが分断されている。



3-6. 大洲市城下町の町並み評価

- 城下町の面影を残す景観や観光資源が多く残っている一方、一部では新しい町並みが混在し景観を分断している。
- 城下町エリアの地域資源を生かしたまちづくりを進めることによって、住む人にも訪れる人にも魅力的なまちとなる可能性を持っている。

優位点

- 大洲の観光の目玉ともなっている明治時代の町並み
→ 観光資源となっている価値ある町並
- 通りでなく、街区として町並みが残っていること
→ 他にはない楽しいまち歩きと、現代に少なくなった調和のとれた景観を目指すことができる可能性
- 大正～昭和～現在を感じられる街区
→ 様々な建物が建ち並ぶ多様性
- 江戸時代当時の町割が残り、当時の姿を想像しやすい
→ 昔に思いを馳せることができる情緒を感じる町
- お城～城下町～臥龍山荘と歩くのに程よい範囲
→ 観光に適した回遊性とスケール感
- 市で景観条例を設けており、景観の統一を図っている。
→ 未来に繋がる可能性

課題

- 観光の目玉となっている明治時代の町並みを中心に大正～現代の住宅が広がっているが、時代性が異なっていたり、景観に配慮している建築とそうでない建築が混在している。
- 景観条例が一部の新しい建築物に関しては反映されていない。
→ 町並の連続性が損なわれている
- 町並みの中の商店街が、外観や看板についての配慮ができていない店舗も多く、統一感を薄れさせている。
→ 価値ある町並の価値を落としている
- 利用されていない空き家が多い
→ 価値ある建物が見られる一方で空き家も多い
- 高い堤防があるため町中で肱川を望める場所が少ない
→ 安全を優先しているものでありやむを得ないが、肱川が遠くに感じられる



4. 大洲城下町の地域資源

4-1. 大洲城下町周辺の地域資源

- 大洲城下町周辺には、肱川の自然や城下町の歴史遺産などの魅力的な観光地域資源が多く点在している。
- 魅力ある観光まちづくりに、これらをどのように活用していくかが重要である。



4-2. 肱川の自然・文化

- 肱川は、大洲城下町の礎であるとともに、文化や暮らしを築いてきた。
- いつも肱川とともに生きてきた大洲城下町の人々の心の支えでもある。

肱川は大洲の町が生まれるはるか昔から存在していた。

肱川は水害だけでなく様々な恵みをもたらしている。

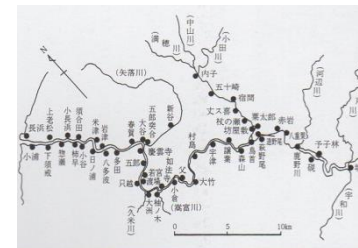
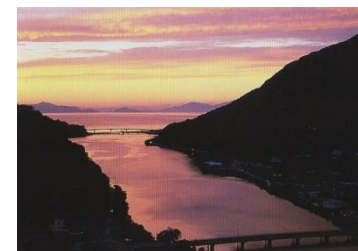
上流～下流でさまざまな表情を持つだけでなく、大洲の町の基礎がここにある。

地形や自然(自然現象)

- ・世界的にも珍しい独特な表情を持つ川
- ・源流から河口までの直線距離が18kmでありながら、川の長さ103kmもの長さを誇る。
- ・地形より先にできていた古い川(先行性河川)であり、曲流しながら定まってきた
- ・河口部が峡谷(ふつう扇状地や三角州が形づくられる河口部が狭い。また、それゆえにボトルネックとなり、水害が発生しやすい要因にもなっている。)
- ・河床勾配がゆるやか。(河口から16キロ先の地点で海拔9m)
- ・霧が発生しやすく、河口部では肱川あらしとして知られている。

文化・景観

- ・盆地でありながら外につながる水の道肱川を要していた
- ・勾配が緩やかだったために、50キロ以上も山奥まで船が行き来した
河港は50箇所ほどあり、起点～終点の間で最も大きい河港が大洲だった
- ・帆掛船や筏舟が河港に集まり散る様子は大洲の原風景のひとつ
- ・肱川の豊かな水量ゆえに、養蚕・製糸や木蠟が盛んだった
- ・アユ漁やカジカ漁が盛ん



4-3. 2つの主要観光施設

- かつて大洲が栄えた時代の記憶を残す、2つの魅力ある観光施設が観光拠点となっている。
- いずれも、大洲城を形づくった人々のこだわりや想いが詰まった施設であり、様々な活用がされている。

大洲城

- ・藤堂高虎の時代に築かれ、以来大洲城下町のシンボルであった大洲城は、明治時代に天守の取り壊しが行われたが、100年の時を経て復元され、現在の大洲に装い新たにそびえ立っている。
- ・天守雛形と呼ばれる江戸期の木組模型や明治期の古写真などの史料をもとに往時の姿を木造で正確に復元された日本でも数少ない天守である。
- ・現在は、年中無休で公開されており、9:00～17:00（札止16:30）に天守の見学が可能になっている。
- ・入城のほか、JR四国の観光列車「伊予灘ものがたり」が鉄橋をゆっくり渡るときに、大洲城本丸からのぼり旗を振って歓迎する「大洲城歓迎旗振り」や、鉄砲隊の公開演習を行うなど大洲城観光に合わせて様々な催しが開催されている。
- ・ライトアップイベントが行われたり、花火と合わせたシーンになるよう花火会場が設置されるなど、城ならではのシルエットが意識された催しも多い。
- ・観光として非常に魅力的な施設であり、一般開館時間以外のイベント利用などの可能性も検討が必要である



臥龍山荘

- ・大洲・肱川随一の景勝地臥龍淵に築かれた別荘。臥龍院、不老庵、知止庵、3つの風情が異なる建造物と借景庭園が広がっている。富士山・肱川の光景が来訪者の五感にはたらきかける。
- ・臥龍院は数寄屋造りで、清吹の間は欄間の透かし彫りにより水の流れを表現。壺是の間は桂離宮様式が色濃く現れるなど、各所に創意工夫がなされている。
- ・知止庵は臥龍院と同時期に浴室として建てられた建物。
- ・不老庵は臥龍淵を眼下に見る崖の上に懸り造りに建てられた数寄屋造りで、庵そのものを船に見立てて作られている。
- ・現在は、大洲城と同様に年中無休で公開されており、9:00～17:00（札止16:30）まで入場可能である。
- ・名建築の見学や日本庭園の散策に利用でき、不老庵でお茶席を設けていたり、新緑や紅葉の季節は格別の美しさである。
- ・観光として非常に魅力的な施設であり、一般開館時間以外のイベント利用などの可能性も検討が必要である



4-4. 大洲の伝統・工芸

- 最盛期に比べると衰退しているが、文化を伝える観光資源として魅力的なコンテンツである。
- 新しい観光資源として、伝統や工芸の再生を検討していくべきである。

伝統

鵜飼

岐阜市の長良川、日田市の三隈川に並び、「日本三大鵜飼い」と称されている大洲市の肱川での鵜飼い。大洲の鵜飼いは、鵜匠船と客船の屋形船が併走しながら川を下るという、国内唯一の「合わせ鵜飼い」といわれる手法で行われている。

明治以降は、漁法も近代化が進み一時は衰退していたが、昭和32年に観光事業として復活した。

現在では大洲の夏の風物詩となっている。

水運の歴史

肱川最大の河港であり、水運で発達した大洲であるが、鉄道や自動車交通の発達とともに川船交通は衰退の一途をたどった。

現在は舟運としての利用はほとんどなくなっているが、鵜飼や臥龍の渡しとして形を変えて残っている。



工芸

木蝋

大洲藩の経済を支えた、ハゼノキから抽出する蝋。Japan waxとして明治期には海外にも盛んに輸出された。電気や石油系材料の拡大から衰退することとなった。

蚕糸

蚕糸は良質の伊予生糸として大洲の経済を支える品目であった。経済界の恐慌と化学繊維の出現などによって養蚕が衰退することとなった。

大洲和紙

江戸中期に発達した良質な和紙。大洲和紙は薄くて漉きムラが少ないため、高級で使いやすい書道半紙として重宝されるようになった。機械化による大量生産により衰退することとなった。



4-5. 大洲の食文化

- 肱川の上流から下流、伊予灘まで、山の恵みから海の恵みまで味わえる多様で豊かな土地である。
- 肱川が育む肥沃な土壌と盆地ならではの寒暖差など、食物が美味しく育つ条件が揃っている。

いもたき

愛媛県において、秋に月見を兼ねて、屋外で芋を炊き、それを肴に大勢で宴会すること。里芋をはじめ、鶏肉やこんにゃくなどの具材をたっぷり入れた鍋。いりこだしを使って甘く煮るのが特徴的で、お鍋の締めはうどんやお餅を入れて、最後まで秋の味を楽しめる料理。



伊予灘の海の幸

伊予灘で水揚げされる新鮮な魚介類。中でも下関ブランドとまったく同じフグは刺身や鍋、唐揚げ、雑炊などフルコースで味わう名物となっている。



鵜飼と川魚

鵜飼いは古事記や日本書紀にも記述がある昔ながらの漁法で、鵜の食道で魚を一気に気絶させるため、傷がつかずしかも新鮮。大洲藩では江戸時代にも鵜を使った漁法が行われ、古くから天皇、貴族、大名などへの川魚が献上品されていた。鮎や鰻などが捕れる。



大洲の野菜

肱川が育んだ栄養豊かな土と水に恵まれ、愛媛県下でも有数の農業地帯で栽培される野菜(さといも、たけのこ、トマトなど)



志ぐれ

厳選された小豆を使用し、米粉、餅粉、砂糖を混ぜ合わせ、1枚1枚丁寧にせいろで蒸しあげたもの。見た目のみずみずしさと食感が魅力のお菓子。市内の各店舗ごとに食感や甘みが異なり食べ比べの楽しみも味わえる。



大洲のフルーツ

肱川が育む肥沃な土壌と盆地ならではの寒暖差で、美味しく実る果物(なしやいちご、すいかなど)



4-6. 城下町周辺のイベント・アクティビティ

- 大洲城下町の歴史文化や景観を背景に、その魅力を体験できるコンテンツがすでに多く実施されている。
- 訪問客も地域住民も共に楽しむことができる時間が生まれている。

城下のMACHIBITOやおおず浪漫祭などレトロなお祭り

城下のMACHIBITOは風情が残る城下町を舞台に2日間行われるコンセプト型のマルシェ。おおず浪漫祭は「大人には懐かしい 子どもには新しい」をテーマに、明治、大正、昭和の時代を再現した祭り。どちらもレトロな大洲を体感することができる。



臥龍の渡し

臥龍山荘下から屋形船に乗って出発し、肱川の川面に映る臥龍山荘の風情を感じながらの遊覧。約10分間大洲随一の景勝地「臥龍淵」に感じられる。住民の足であった「渡し」を復活させた取り組みでもある。



おおず歴史華回廊

情緒が残る大洲の町並みを地元を知り尽くした認定案内人と一緒に、歴史の見どころや地元のお店を楽しく巡るまち歩きツアー。大洲に暮らす人たちとの出会いがまち歩きをさらに魅力的で興味深くしてくれる。



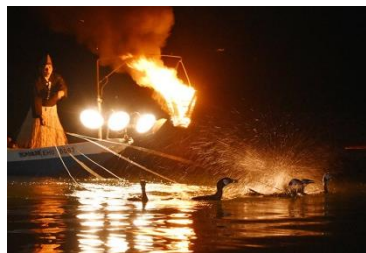
大洲藩鉄砲隊

大洲城天守木造復元10周年記念として、平成26年(2014)8月に結成された。現在、鉄砲隊の隊員は14名で、毎月第3土曜日午後2:00から大洲藩鉄砲隊公開練習を開催しており、大洲城観光に賑わいを与えている。



鵜飼

岐阜市の長良川、日田市の三隈川に並び、「日本三大鵜飼い」と称されている大洲市の肱川での鵜飼い。大洲のうかいは、鵜匠船と客船の屋形船が併走しながら川を下るといふ、国内唯一の「合わせ鵜飼い」といわれる手法で行われている。



肱川カヌー・SUP

昔ながらの町並み、美しい田園風景、山並みを感じながら肱川を下る、カヌー・SUP体験。大洲から特に勾配が緩やかになる肱川を安心してゆったりと乗ることができる。



4-7. 大洲の文化・気質

- 大洲の文化や気質を語る上で、肱川とともに生きた暮らしや愛着は欠かせない要素である。
- もう一つの文化・気質として、本物を極め・新しい挑戦に挑む精神性がある。

肱川と共に生きる愛着

肱川と共に生きてきた暮らし

- ・肱川の恵みで栄えてきた歴史
- ・親しみやすい緩やかな勾配の川
- ・舟運が盛んで最大の河港であったこと
- ・山から海までつなぐ文化
- ・肱川の氾濫を考慮した町の構造や石垣などの土木構造物・境木など
- ・荒ぶる川で育まれた治水技術
- ・肱川の水で栄えた木蠟や養蚕などの産業
- ・肱川にせり出す造りやしつらえ



本質を極め・新しい挑戦に挑む精神性

先人の思想や行動

- ・肱川を堀として活用した特異な城下町を築いた、築城の名人藤堂高虎や蘭学や西洋兵学などの新しい学問を学び、五稜郭を設計した軍人武田成章など、大洲から排出された先人たち
- ・坂本龍馬に脱藩の道を与え、幕末の時代に新たな時代を見据えた行動をした大洲藩
- ・長年をかけて、本質の日本の伝統文化を表現する臥龍山荘を作り上げた河内寅次郎



大洲城の復元

- ・慶長年間(1596～1614)に建てられたとされる天守を現代によみがえらせる事業
- ・本来は建築基準法で認められない規模であり、2年近い折衝を経て、保存建築物として建築基準法適用除外となり、天守の復元に至った
- ・古来から研究され、多くの資料が残されており、往時の姿を正確に復元できる日本でも数少ない天守であったこともあり、当時の工法で復元された
- ・完成まで10年をかけて実施された



5. 大洲城下町の歴史的風致が感じ取れる建物

5-1. 大洲城下町の歴史的風致が感じ取れる建物の状況

- 風情ある町並みとして歴史的な風致が感じ取れる建物が数多く残っている。
- 特に東側のエリアで多く見受けられ、観光まちづくりの実施による活用が期待される。



6. 大洲城下町の地域評価

6-1. 大洲城下町の地域ポテンシャル

- これまでの調査結果を踏まえると、大洲城下町の観光ポテンシャルは下記の通りである。
- その中でも、肱川、大洲城・城下町、大洲人の気質の3つはコンセプト検討の核となる本質的資源であるとする。

◎ 肱川と共にあるらし

- ・ 肱川
- ・ 風光明媚な環境
- ・ 肱川越しの富士山
- ・ 独特な地形と肱川文化
- ・ 帆掛け船の風景
- ・ 霧の発生しやすい気候
- ・ 河口部での肱川あらし



○ 大洲の立地

- ・ 拠点都市松山から1時間のアクセス
- ・ 九州から瀬戸内まで多方向から回遊性ある訪問が可能な立地
- ・ 電車と高速道路を持つ交通アクセス
- ・ 松山、内子、西予など、魅力的な観光エリアと近接



◎ 大洲城・城下町の歴史文化

- ・ 江戸時代に築かれた歴史ある城下町
- ・ 復元され見事な姿を見せる大洲城
- ・ 今も残る趣のある町並み
- ・ 贅を尽くして日本の精神を表現する臥龍山荘
- ・ 暮らしが残る城下町の佇まい
- ・ 城下町ならではの食文化



○ 所縁の伝統技術・伝統工芸

- ・ 木蠟、製糸、大洲和紙など伝統技術
- ・ 川を生かした舟運
- ・ 鵜飼、帆掛け船などの肱川文化



◎ 大洲人の持つ気質・精神性

- ・ 城の木造復元や臥龍山荘などに見られる、本物を極める精神性
- ・ 先人の、先を見て新しいことにチャレンジする気質
- ・ 日本の文化を残していこうとする心



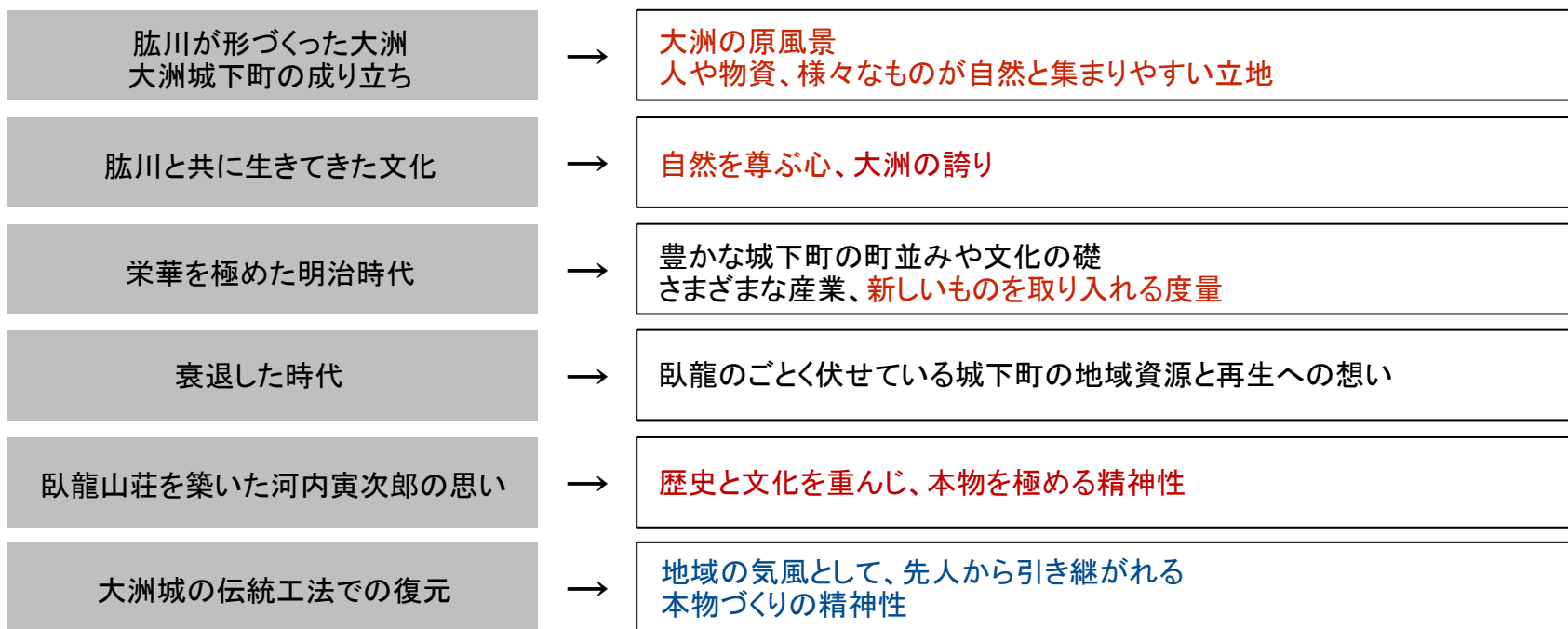
○ 城下町のイベントや体験

- ・ 城下町ならではの歴史や空間を活用した個性的なイベントや体験プログラムの可能性
- ・ 大洲城や臥龍山荘のさらなる観光コンテンツとしての活用可能性
- ・ 肱川を楽しむ体験プログラムの充実



6-2. 大洲城下町の本質的資源とまちづくりキーワード

- 大洲の歴史文化から導き出されるまちづくりキーワードを3つ設定した。
- この3つのキーワードを、大洲のまちづくりの本質として、今後のコンセプトや活用計画を検討する。



【大洲の歴史文化から導き出される3つのまちづくりキーワード】

肱川の暮らし
と愛着

本物を極める
精神

新しいことに
チャレンジする気風

6-3. 地域状況まとめと戦略検討の方向性

大洲の強み

- ・肱川の自然と肱川と共に生きた地域住民の愛着と暮らし
- ・大洲人が持つ、本物を極める精神性や新たなチャレンジをする姿勢
- ・歴史ある大洲城や城下町が、一部ではあるが今も残っている価値がある町並み
- ・大洲城や臥龍山荘など、他に類を見ない地域の核となる価値ある観光施設
- ・歴史的背景や町並みを生かした、特徴的なイベントやアクティビティなどが新たに生まれ始めている
- ・観光地も持つ拠点都市松山へ近接し、周辺観光エリアへの回遊性のある立地
- ・鉄道と高速道路でのアクセスが可能
- ・伸びが期待されているインバウンドの中でも滞在日数や宿泊・飲食・娯楽などの体験への消費額が多い欧米系の観光客が求める本物の歴史的資源が豊富である
- ・活用可能な歴史的建造物の多数の空き家

課題

- ・観光を地域産業化するという意識が低い
- ・観光地としての知名度のさらなる向上
- ・滞在型施設が不足しており滞在型観光の体制となっていないため、消費金額が限定的であると考えられる
- ・町並みが残っている部分もあるが、新しい開発によって町並みやその連続性が失われている
- ・人口減少や空き家の増加など、地域の景観や活力が失われる減少が起こっている

市場・社会状況

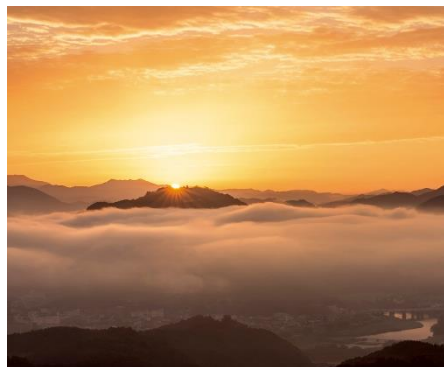
- ・外国人観光客を中心とした観光産業が日本の成長産業と位置付けられ、急成長している
- ・歴史文化資源を持つ地域は地方部でも観光産業成立の可能性がある
- ・期待されているインバウンドの中でも滞在日数や宿泊・飲食・娯楽などの体験への消費額が多い欧米系の観光客が求めるのは、本物の歴史的資源である
- ・インバウンド市場では、各観光地についての知識や情報を的確に与えると、元々認知度の低い観光地でも、その観光地の魅力が高まる傾向にあるため、現時点で認知度の低い観光地でも魅力を形成できる可能性を持っている
- ・政府においても「歴史的資源を活用した観光まちづくり」を推進している

戦略検討の方向性

- ① インバウンドを中心とした観光を大洲城下町の「新たな地域産業」として捉えて育てる
- ② 調査より設定した地域の本質(まちづくりキーワード)を基本とした戦略・コンセプトとする
- ③ 先人の貴重な町並みや歴史文化を、尊重しながらまちづくりを進め未来につなぐ
- ④ まずは、不足している滞在施設や店舗等を中心に整備して滞在型観光の礎をつくる

7. 大洲城下町の地域戦略

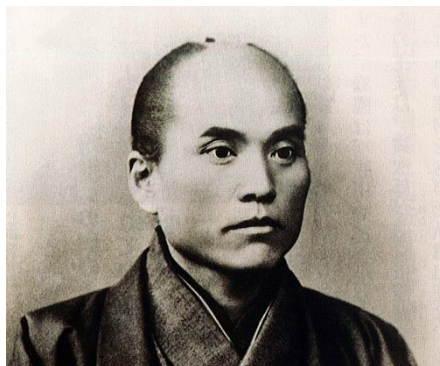
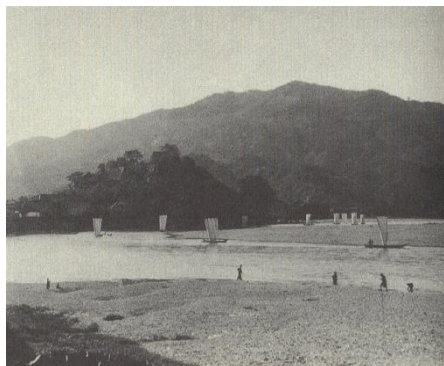
7-1. 本質的コンセプト



龍が棲む町

－ 大洲の龍が新たな時代をつくる －

天に昇って恵雨を降らせ、臥して蓬莱山となり、嵐となって肱川を下る。
先哲として顕現しては城下を築き、学問を成し、産業を興し、数寄を施す。
そして今、この町が再び輝きを取り戻すために、
私たちは私たちの中に龍を呼び起こし、大洲に新しい時代を拓かんとする。



7-2. 大洲の龍とは ①

- 大洲のまちづくりを語るには「龍」という言葉がしっくりくる。
- まちづくりの3つのキーワードは、すべて「大洲の龍」によって表現することができる。

【3つのまちづくりキーワードと龍】

肱川の暮らし と愛着

龍のような暴れ川であり
恵みの川でもある肱川

龍のようにゆっくりと
雄大な肱川の自然

龍のような肱川あらしの
風や雲や水が流れる様相

龍である肱川の自然と
共に生きる肱川と暮らし

本物を極める 精神

龍が潜むような
美しい景観に生まれた
臥龍山荘の本物性

龍のようにこだわりや
精神性を持ちながらも
遊び心のある姿

新しいことに チャレンジする気風

大空を自由に飛び回る
龍のような
自由な気風

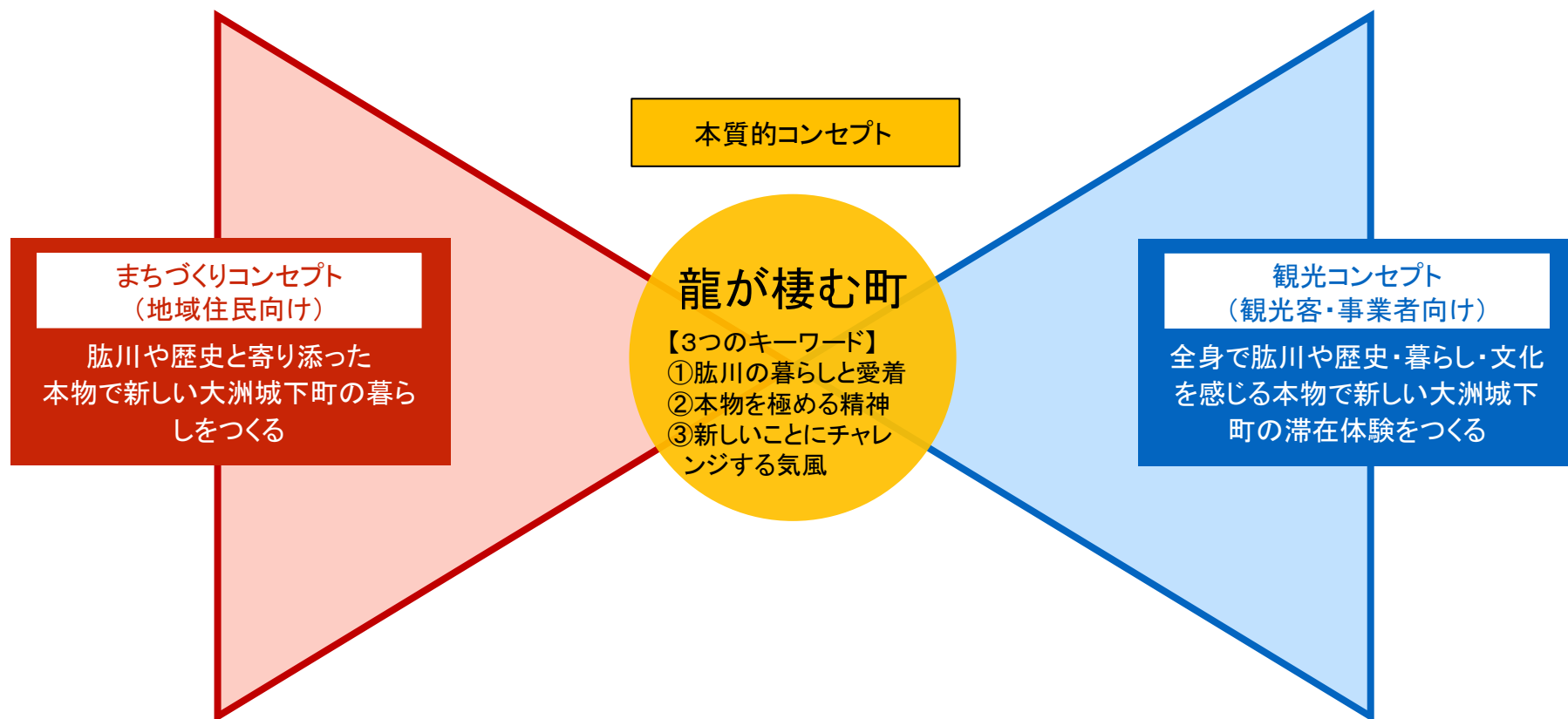
新たな世界を目指す
龍のような
大胆な上昇志向



3つのまちづくりキーワードの中には「大洲の龍」が生きている

7-3. コンセプト展開

- これまでの調査結果を踏まえると、大洲城下町の観光ポテンシャルは下記の通りである。
- その中でも、肱川、大洲城・城下町、大洲人の気質の3つはコンセプト検討の核となる本質的資源であるとする。



7-4. コンセプト実現に向けた役割

- まちづくり・観光それぞれのコンセプト実現に向けて、各々の立場でコンセプトを意識して役割を果たす必要がある。
- 地域の価値を発信するエリア計画からも、「暮らしや文化を体験する観光」であることを第一に事業実施を検討。

地域住民

- ・肱川や歴史と寄り添った本物で新しい城下町の暮らしづくりに参画
- ・地域活性化のための一つの方策として、観光まちづくりを観光客や事業者と共有し、地域づくりを展開
- ・豊かな生活空間として、本物で新しい城下町の景観や生活環境づくりに取り組む
- ・観光事業を町の一つの生業として捉える

観光客

- ・表面的な城下町の観光にとどまらず、本物の城下町の暮らしや歴史体験、地域滞在を強く感じる
- ・地域の暮らしや歴史文化を体験するために、宿泊を伴う滞在型の観光を意識する

事業者

- ・各事業者の事業やコンセプトは、全体のまちづくりや観光コンセプトに沿って設定する
- ・事業実施においても、マーケットは意識しながらも、一過性のものではなく、地域の歴史文化や暮らしをつくり体験・滞在してもらうサービスを提供する
- ・観光資源となる地域住民の暮らしの景観や生活環境を尊重した事業実施に努める

行政・まちづくり会社等

- ・本計画の戦略に基づいて、各関係者に協力して観光まちづくりが実現できるように調整、事業実施を促進する
- ・地域の暮らしや文化こそが地域の重要な観光資源であることを意識して、観光まちづくりの中で地域の暮らしの向上を目指す方策を実施
- ・新しい形の観光スタイルに向けた観光客への情報発信を行う

7-5. ターゲット設定

- 大洲城下町がアプローチするターゲット層は下記の通り。戦略的なターゲットは欧米等の外国人観光客。
- 観光ターゲットだけでなく、城下町のコミュニティを支える事業・居住ターゲットも設定する。

観光ターゲット(観光客)

【戦略的メインターゲット】
日本の城下町をどっぷり感じたい
欧米等の外国人観光客



四国、瀬戸内、九州から周遊で一足伸ばして、日本の城下町をどっぷりと感じたい欧米等の外国人観光客。日本の本物の歴史文化に触れたいと考えている。

【サブターゲット】
城下町の新しい息吹を感じたい
国内観光客



都市圏や周辺地域を中心とした国内の観光客。若者から老年層までの夫婦やグループ。都会から少し足を伸ばし、城下町の歴史文化と新しい息吹を感じたいと考えている。

事業・居住ターゲット(居住・ビジネス)

活気ある城下町で事業をしたい
観光事業者



都市圏や周辺地域で、宿泊、飲食、物販、アクティビティなどの観光を中心とした事業を、活気のある城下町に飛び込んでチャレンジしたいと考えている。

歴史ある大洲城下町を誇りに思う
地域住民



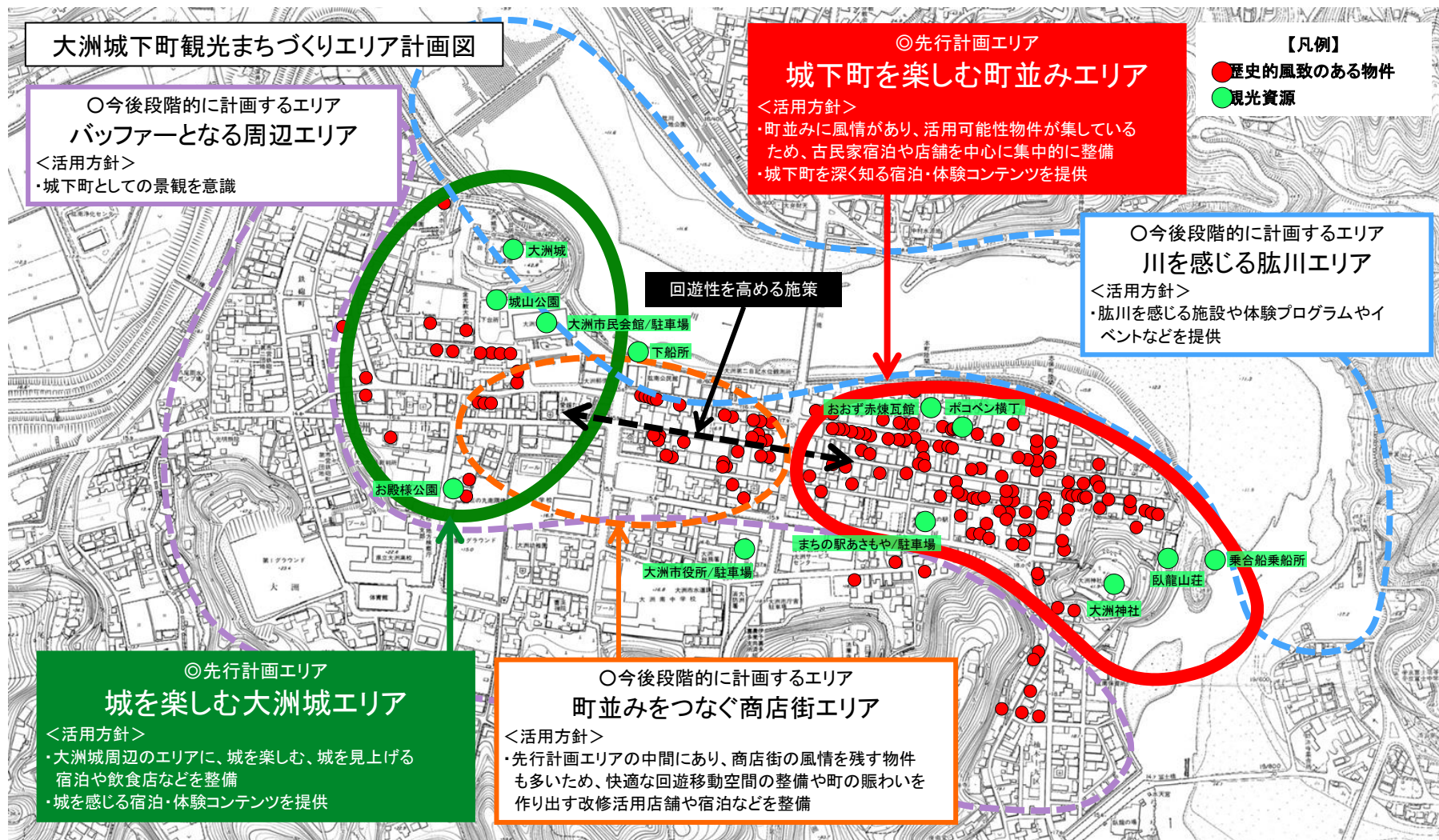
大洲城下町に住む地域住民。豊かな城下町の資源や環境に誇りを持って残しながら、店や仕事が増えて豊かで暮らしやすいまちになって欲しいと考えている。

使われ方	・滞在期間：1～3泊以上 ・城下町ホテル宿泊 ・カフェ、飲食店 ・地域産品の物販店 ・城下町のアクティビティ ・日本の歴史文化体験	・滞在期間：日帰り～1泊 ・城下町ホテル宿泊 ・カフェ、飲食店 ・地域産品の物販店 ・城下町のアクティビティ	・城下町での観光ビジネス開業 ・移住定住 ・カフェ、飲食店(日常利用) ・食料品店(日常利用)	・居住 ・職場(観光産業の雇用創出) ・食料品店(日常利用) ・カフェ、飲食店(日常利用)
休日／平日	平日利用中心	休日利用中心	平日利用中心	平日から休日まで
利用金額	← 高い			低い →

8. 大洲城下町のエリア計画

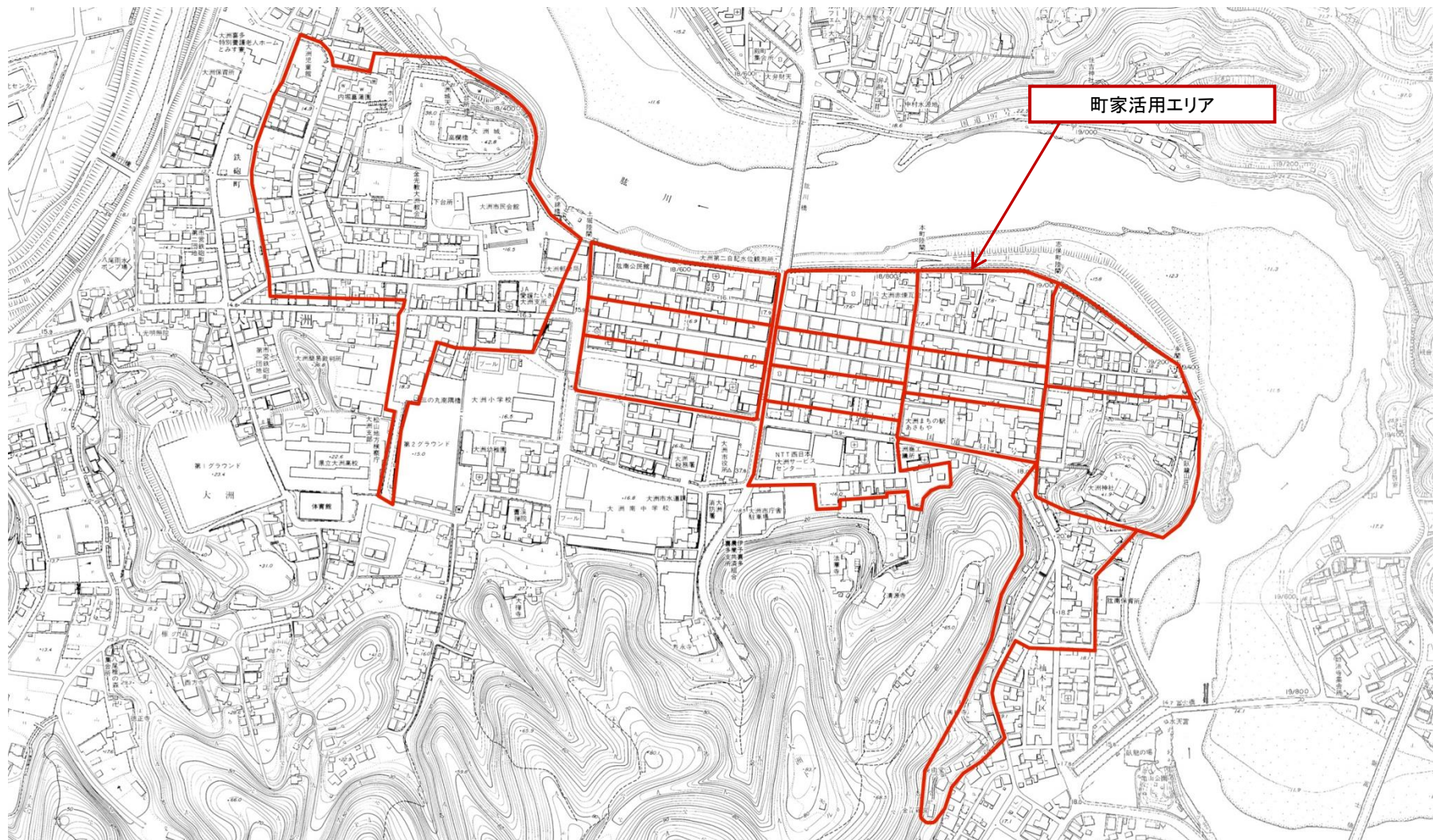
8-1. 観光まちづくりエリア計画

- 城下町を、歴史資源や地域状況によって5つのエリアに分類したエリア計画を設定。
- その中で、大洲城エリアと町並みエリアのポテンシャルが高いため、先行計画エリアとして先行整備を検討する。



8-2. 町家・古民家等の歴史的資源を活用するエリア領域(町家活用エリア)

- 観光まちづくりエリア内において、町家・古民家等の歴史的資源を活用するエリアを設定する。
- 大洲城下町の歴史的風致が感じ取れる建物が残るエリアを包含するものとする。



8-3. コンセプト実現に必要な機能例

- コンセプトの実現に向け、城下町を目一杯体験できる歴史的資源を活用した新たなコンテンツの整備が必要。
- 必要となる機能例を以下に挙げる。これら以外にも城下町を体験を促す機能を各所に配置する必要がある。

歴史的建築物に泊まる宿泊施設

城下町を回遊しやすい遊歩道

大洲城の城ステイ&ウエディング

城下町を肌で感じる特別な体験

肱川を近く感じるカフェ

古民家を活用した個性的な店舗

城下町を深く感じるガイドツアー

鵜飼船の新しい活用

地域の食文化を表現するレストラン

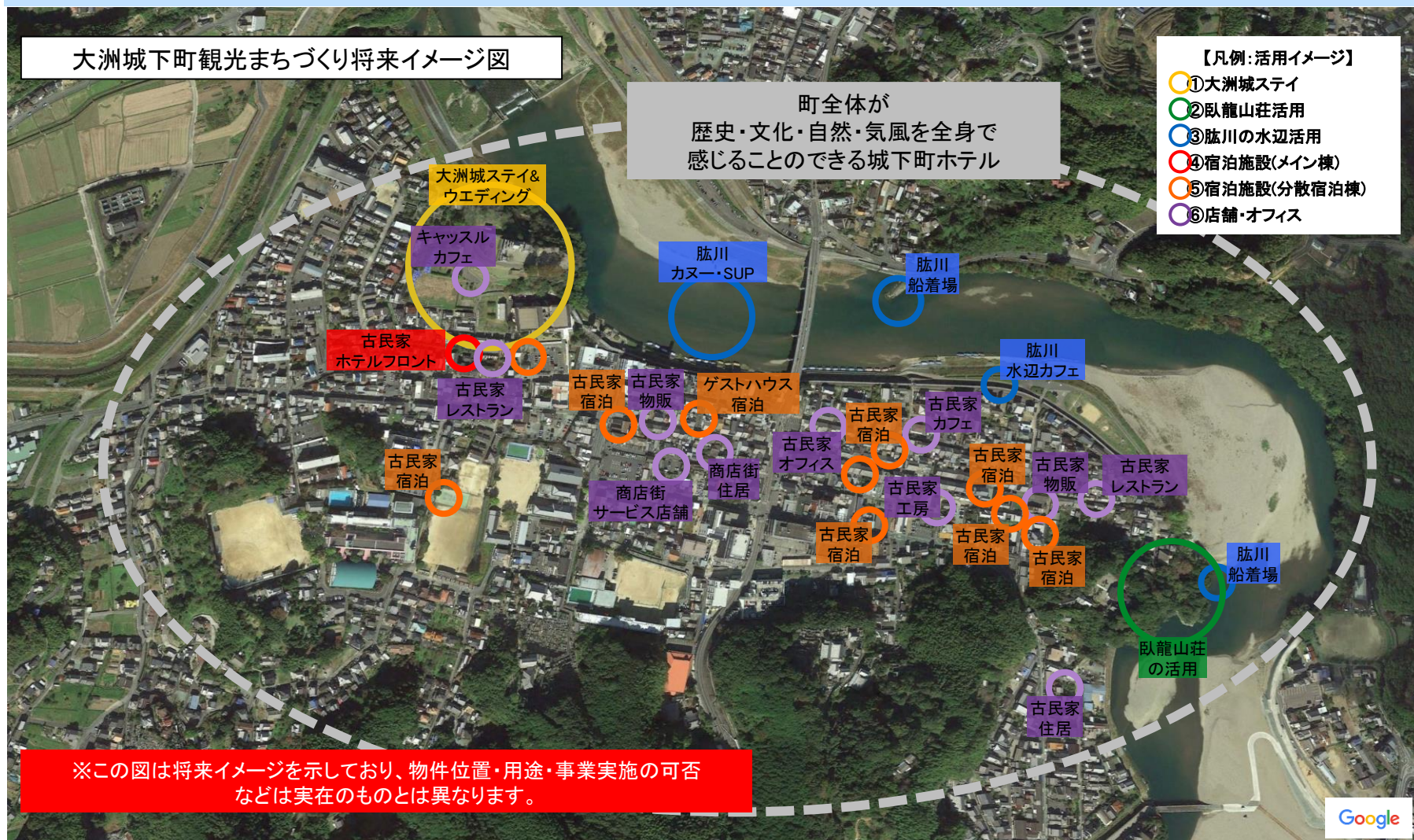
小移動を気軽にできるモビリティ

臥龍山荘の特別利用

肱川の新しいアクティビティ

8-4. 観光まちづくりの将来イメージ①: 全体イメージ

- これまでの調査結果を踏まえると、大洲城下町の観光ポテンシャルは下記の通りである。
- その中でも、肱川、大洲城・城下町、大洲人の気質の3つはコンセプト検討の核となる本質的資源であるとする。



8-5. 観光まちづくりの将来イメージ②: 整備機能

【活用イメージ①】

大洲城の活用

- ・文化財の価値を担保した上で、大洲城の開館時間外の時間を利用して、大洲城ステイ(城主体験)の特別な体験を提供
- ・その他限定の域内外活用のイベントや歴史体験プログラム、ウエディングなども実施



【活用イメージ④】

宿泊施設(メイン棟)

- ・大規模な古民家は宿泊のメイン棟としてホテルフロントを配置
- ・建物規模によりレストランや複数の客室などの併設も検討
- ・まちの特徴となる建物を活用し、地域のシンボルとなるように施設整備を行う



【活用イメージ②】

臥龍山荘の活用

- ・臥龍山荘の開館時間外の夜と朝の時間を活用して、城下町滞在客への特別な空間での食事や、月夜のバーなどを実施
- ・お茶や日本文化などの体験も実施



【活用イメージ⑤】

宿泊施設(分散宿泊棟)

- ・小規模で風情ある町屋などは一棟貸しの宿泊等として活用
- ・建物規模が大きい場合には、2-3部屋や一部を店舗として活用することも検討



【活用イメージ③】

肱川の水辺活用

- ・肱川の自然豊かな水の恵みや、肱川から城や城下町を眺めるカヌーやサップなどの体験プログラムを提供
- ・川を望む水辺のカフェや船を使った体験アクティビティなども今後検討



【活用イメージ⑥】

店舗・オフィス・住居

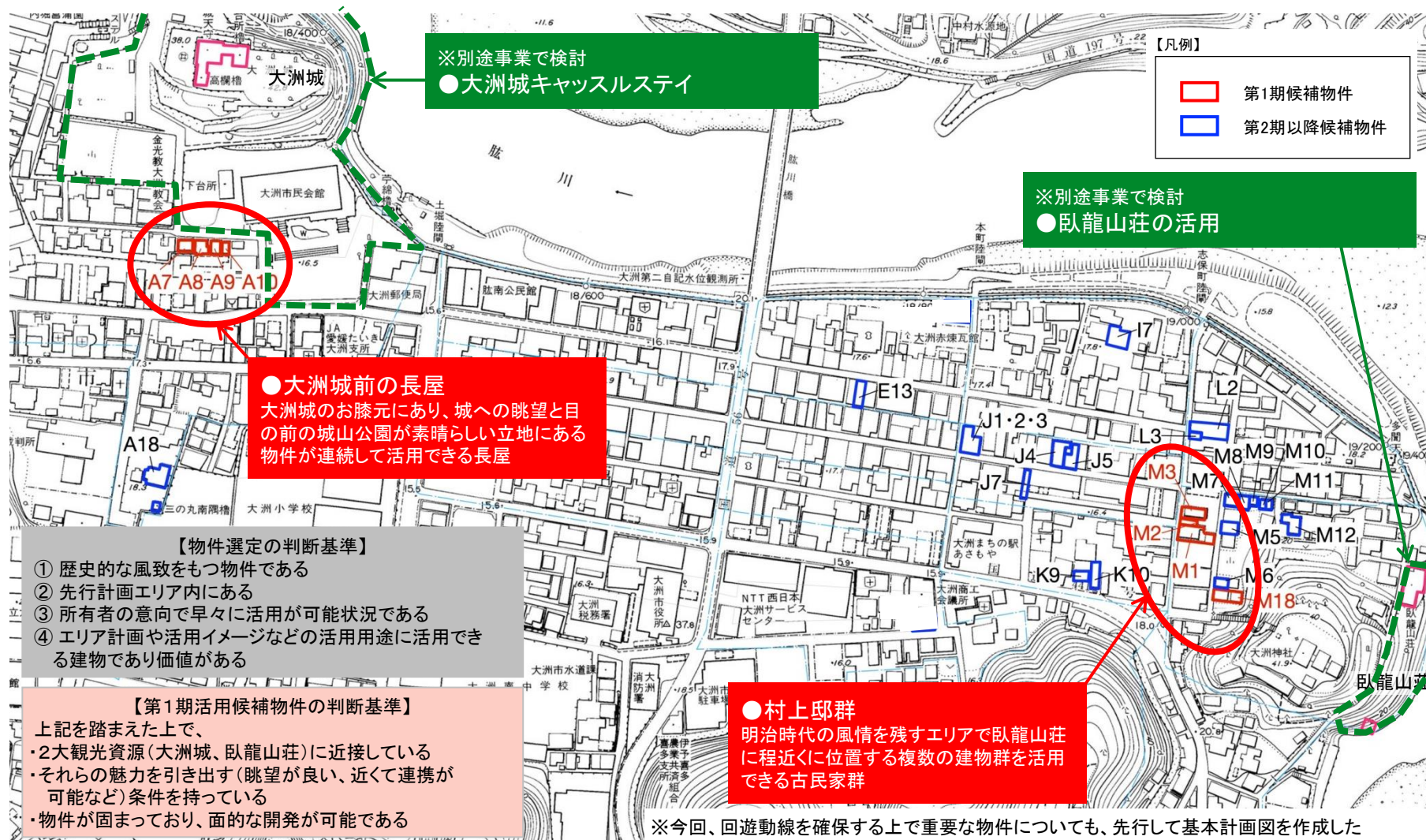
- ・古民家空き家などを改装し一部は新しい店舗(飲食店、物販店、サービス店舗)などに活用
- ・移住者のための住居なども整備
- ・オフィスなどの業務機能も検討
- ・古民家でなくても、地域状況に応じて改修して活用を検討。



9. 主要物件の活用計画

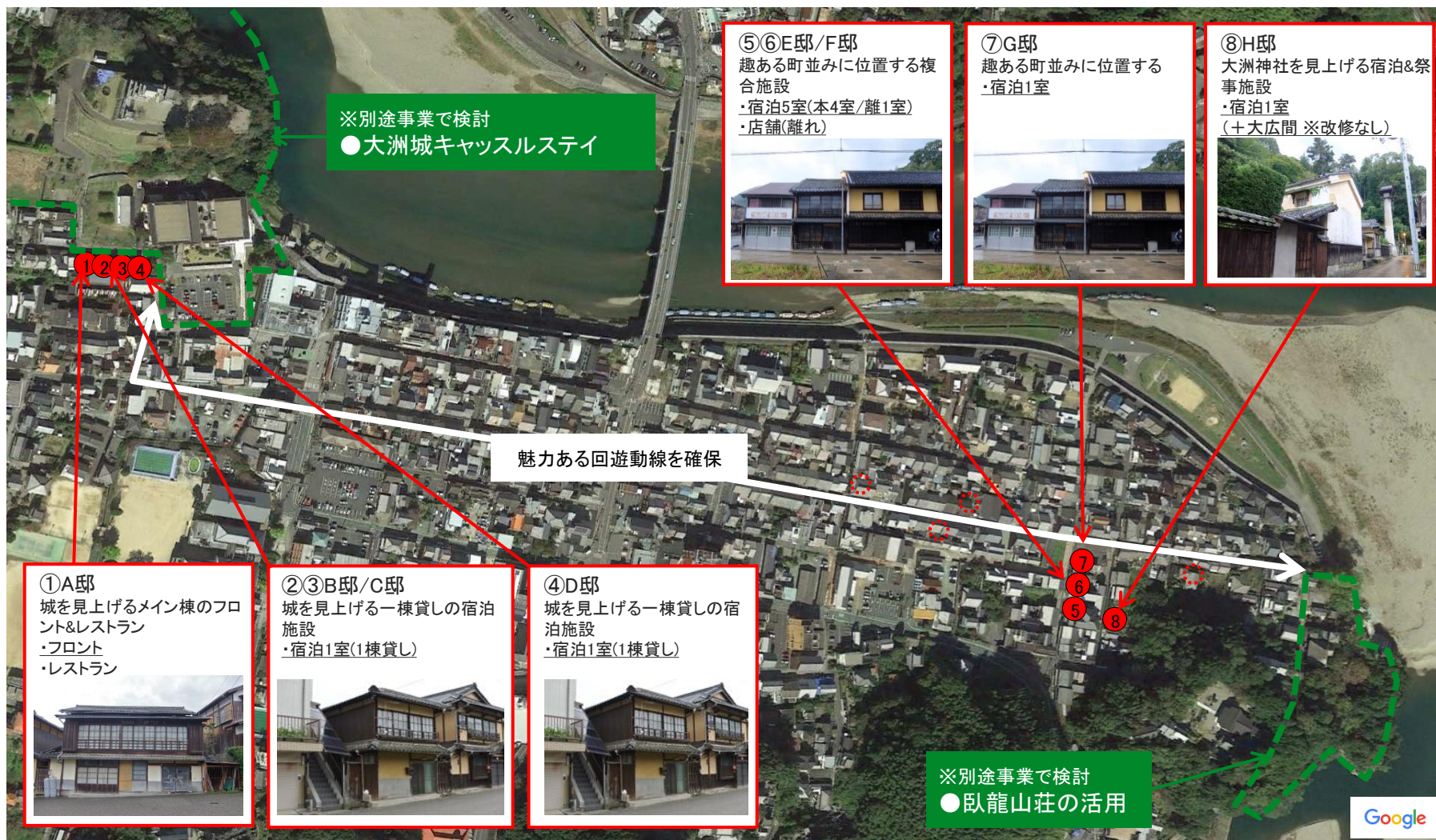
9-1. 主要物件の選定

- コンセプトの実現に向け、城下町を目一杯体験できる歴史的資源を活用した新たなコンテンツの整備が必要。
- 必要となる機能例を以下に挙げる。これら以外にも城下町を体験を促す機能を各所に配置する必要がある。



9-2. 第1期活用計画

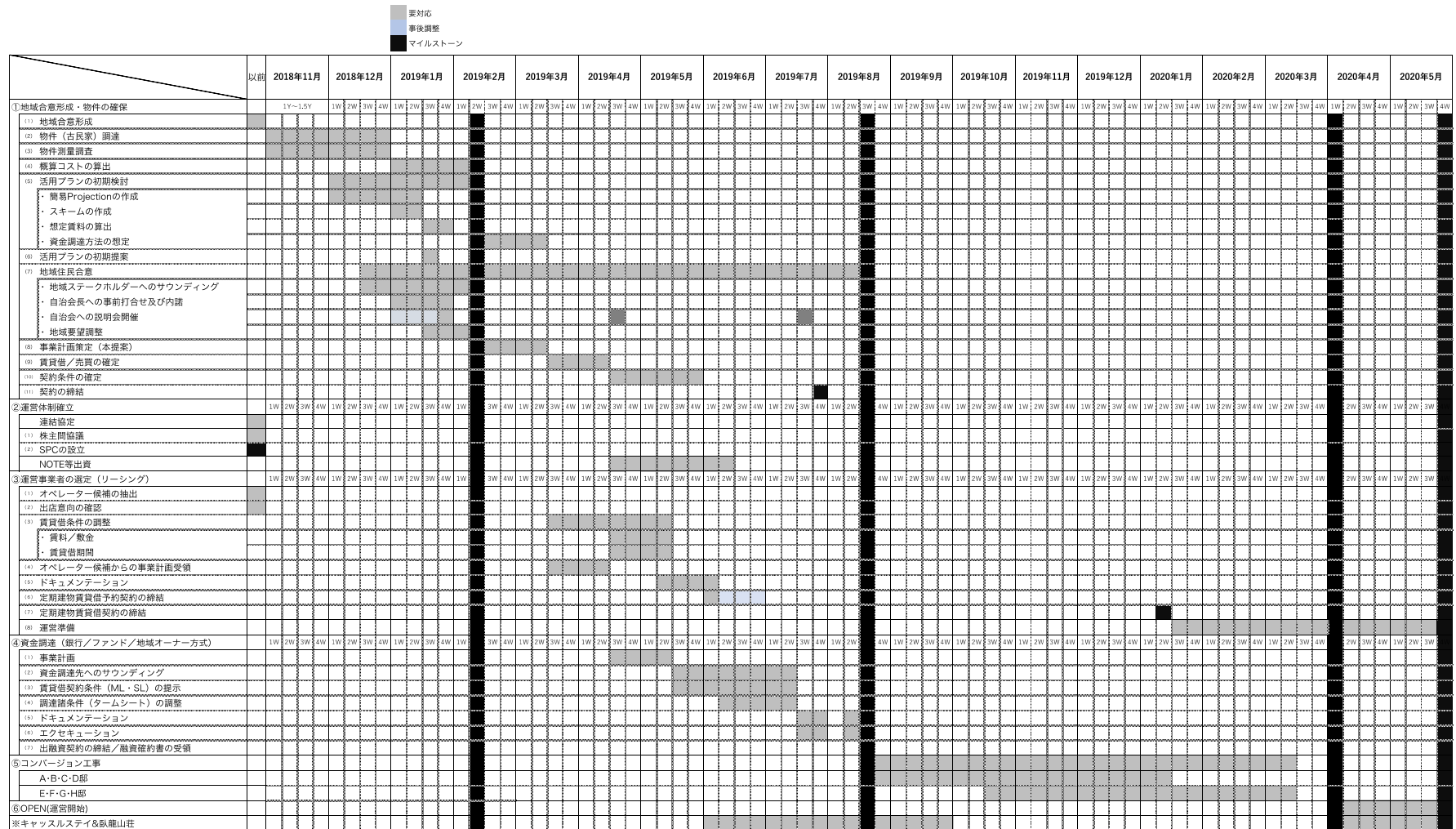
- 城下町を、歴史資源や地域状況によって5つのエリアに分類したエリア計画を設定。
- その中で、大洲城エリアと町並みエリアポテンシャルが高いため、先行計画エリアとして先行して整備を検討する。



10. 1期工事スケジュール

10-1. 1期工事スケジュール

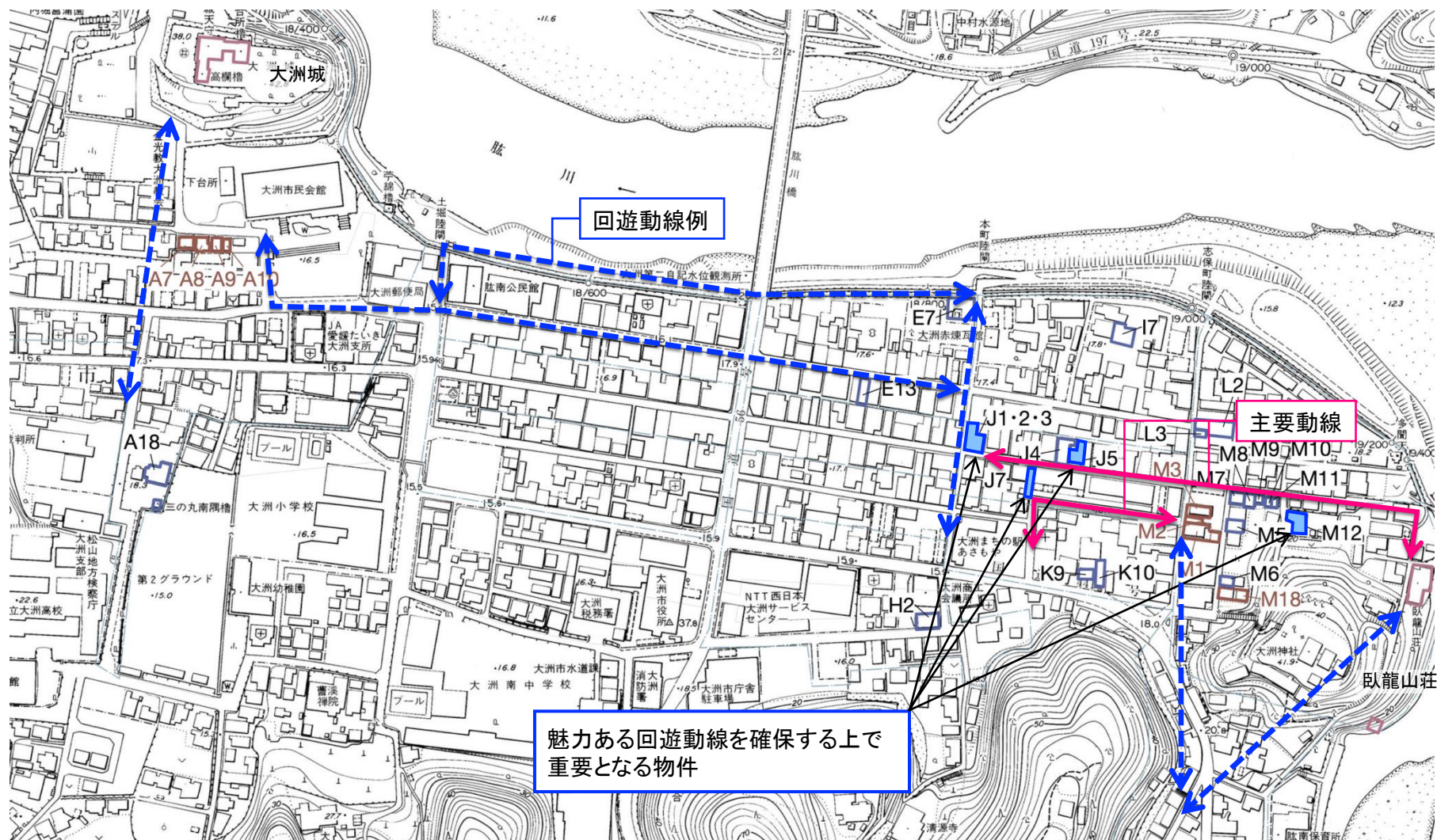
● 観光まちづくり町家活用エリア基本計画:事業スケジュール(2018年11月～2020年5月)



11.魅力ある回遊動線を確保する上で重要となる物件

11-1. 魅力ある回遊動線を確保する上で重要となる物件の選定

- 物件選定の判断基準に基づき、魅力ある回遊動線を確保する上で重要となる物件を選定し、第2期以降に計画することとした。



大洲市観光まちづくり町家活用エリア基本計画

大洲市観光まちづくり戦略会議
2018（H30）年度

作成業務受託：一般社団法人ノオト

NOTE
一般社団法人ノオト